

<分担研究報告>

小児の発育発達に及ぼす地域・家庭の 影響に関する研究

分担研究者 高野 陽

小児の発育・発達の評価は、個々または集団において、広く小児保健活動の現場で実施されており、その中心的役割を果しているといっても過言ではない。その評価にあたっては何らかの基準となるべき「値」を用いて行われることが一般的であるが、その「値」が求められる根拠となる条件に関しては、発育発達に関する古くから行われてきた研究によって指摘されているし、小児保健医療の現場において、現在の「値」が十分にその任を果していないという意見もある。その背景には、評価の対象となる小児の実態を適切にふまえたものではなく、小児の条件別に作成された「値」による評価が必要であり、その作成が望まれていることもあろう。その見地から、地域条件・養育条件などを考慮した小児の発育発達に関する研究を行う必要性が強調され、今回の研究を分担することになった。

分担研究は、小児の発育発達状態に地域条件・養育条件がいかなる影響を及ぼすかを検討することを目的としており、4人の研究協力者を得て、4つの視点からの研究を実施した。

- ① 乳幼児の発育発達の縦断的研究(窪田英夫・東京都がん検診センター副理事長)
- ② 発育発達にみられる地域差に関する研究(東郷正美・東京大学教育学部教授)
- ③ 食行動からみた養育条件と発達に関する研究(八倉巻和子・大妻女子大学家政学部教授)
- ④ 乳幼児の発育発達に影響を及ぼす保育条件に関する研究(南部春生・聖母会天使病院小児科部長)

であり、各々の研究によって、現代の小児の発育発達状態の評価をするにあたっての重要な指標が得られるものと期待している。

その個々の研究について概略を述べる。

- (1) 乳幼児の発育発達の縦断的研究(研究協力者・窪田英夫)

小児、特に、乳幼児の発育発達の評価指標として現在活用されている「基準値」は、横断的調査によって作成されたものであるが、縦断的調査に基づく資料を用いた「基準値」の必要値が指摘されており、本研究はその作成を目的とした研究である。

全国規模で地域特性を考慮して、乳幼児の発育発達に関する縦断的調査の可能な病院を選び、出生から14か月までの月齢毎の身体計測値・栄養法・発達状況などを調査する。全国44施設において、約2,100例を対象に調査を実施している。

このような全国的規模での追跡調査は、わが国では、これまでになく、その結果は重要な意味を有することが考えられ、次年度以降の結果が期待される。

- (2) 発育発達にみられる地域差に関する研究(研究協力者・東郷正美)

小児の発育発達、特に、身体発育については、地域差がみられることがいわれており、わが国においても、身長では「北高南低」の傾向がみられる。この原因の究明はまだ行われておらず、原因を明らかにすることにより、保健指導の実践にも役立つことが考えられる。

縦断的研究方法がこの研究にも活用され、都鄙部との比較や全国的視点での比較によって、その原因を明らかにするというものである。

- (3) 食行動からみた養育条件と発達に関する研究(研究協力者・八倉巻和子)

発育成達は食行動に影響されるとともに、食

行動も発育発達の影響を受ける。特に、食行動は、乳幼児自身の条件も重要な影響因子ではあるが、養育条件が非常に大きな関係をもつことが知られている。それ故、家庭及び施設における食事という場面を介した養育条件が、どのように乳幼児の発達に影響するかを検討することによって、指導のあり方が検討できると考えられる。

本年度は、食行動に問題のあった乳幼児の養育条件を検討している。

(4) 乳幼児の発育発達に影響を及ぼす保育条件に関する研究（研究協力者・南部春生）

女性の社会進出が盛んになるとともに、いわゆる保育に欠ける乳幼児が多くなっている。それらは保育所において生活を送っているが、保育が乳幼児の心身の成長にいかなる影響を及ぼすかは必ずしも明確にされていない。今後、就労の多様化に伴い保育形態の多様化を考えると、よりよい発育発達を促すために必要な保育条件の検討は不可欠である。

保育所及び幼稚園を対象として調査し、その施設に通う乳幼児の実態と保育活動の実態の把握を行い、発育発達に影響する要因について検討した。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



小児の発育・発達の評価は、個々または集団において、広く小児保健活動の現場で実施されており、その中心的役割を果しているといっても過言ではない。その評価にあたっては何らかの基準となるべき「値」を用いて行われることが一般的であるが、その「値」が求められる根拠となる条件に関しては、発育発達に関する古くから行われてきた研究によって指摘されているし、小児保健医療の現場において、現在の「値」が十分にその任を果していないという意見もある。その背景には、評価の対象となる小児の実態を適切にふまえたものではなく、小児の条件別に作成された「値」による評価が必要であり、その作成が望まれていることであろう。その見地から、地域条件・養育条件などを考慮した小児の発育発達に関する研究を行う必要性が強調され、今回の研究を分担することになった。

分担研究は、小児の発育発達状態に地域条件・養育条件がいかなる影響を及ぼすかを検討することを目的としており、4人の研究協力者を得て、4つの視点からの研究を実施した。

乳幼児の発育発達の縦断的研究(窪田英夫・東京都がん検診センター副理事長)

発育発達にみられる地域差に関する研究(東郷正美・東京大学教育学部教授)

食行動からみた養育条件と発達に関する研究(八倉巻和子・大妻女子大学家政学部教授)

乳幼児の発育発達に影響を及ぼす保育条件に関する研究(南部春生・聖母会天使病院小児科部長)であり、各々の研究によって、現代の小児の発育発達状態の評価をするにあたっての重要な指標が得られるものと期待している。